

< 県研究主題 >

児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 岩永 裕樹 (県西地区)

< 研究主題 >

児童一人ひとりの生きる力と真鶴を愛する心をはぐくむふるさと教育

1 提案内容

真鶴小学校の総合的な学習の時間は、ふるさと教育を推進し、ふるさとに愛着をもつ心を育てるという観点から、身近な海や山を対象に学習を進めている。3年生は「親しみ」、4年生は「恩恵」、5年生は「働きかけ」、6年生は「追究」というキーワードをもとに、学校全体で系統的に学習対象を構成し、単元を設定している。

4年生の本単元「まなづるの海のめぐみ」では、自然豊かな真鶴の海のよさをどのように伝えたいか、伝えていくかについて、児童一人ひとりが自分なりに伝えることができるようにしている。そして活動のなかで、ふるさとに愛情をもつ心の育成につなげていくことを目指している。自ら進んで調査活動や体験により、真鶴の海に携わる人々を知ること大切にして、真鶴を愛する心を育むことを目標とした実践である。

(1) 研究の取り組み

単元名「まなづる海のめぐみ」 第4学年 (50時間)

① みんなにとって真鶴のよさやお気に入りは何だろう

平成21年度の5年生が総合で作成した真鶴BOOKを読み、自分にとってのお気に入りは何かを振り返るきっかけとした。

② 岩海岸にいてゴミ拾いをしよう

海には「ゴミがたくさんある」というイメージをもつ児童が多かったので、夏にゴミ拾いに行った。

③ まなづるの海のめぐみを考えよう

海と自分の暮らしの関わりにふれ、海にあるものについて調べてみることにした。そこで、主にあがった「魚など海に生息する動物について」「海藻について」「海水について」という3つの項目をインターネットや本などの情報をもとに調べる活動を行った。

④ 貝類博物館の学芸員さんとディスカバールーの方に、話を聞いてみよう

海の仕事に携わるようになったきっかけやどんな仕事をしているのか、真鶴のすばらしさについてなどの話をしていただいた。後日ふり返りを行い、真鶴の海のよさについて印象に残ったことや感想を交流した。

⑤ 真鶴漁港ではたらく人に話を聞こう

真鶴の海でとれる魚の豊富さ、漁業を盛り上げていきたいこと、真鶴の漁師が減ってきたことなど話を聞くことができた。

⑥ 1学期の活動の終わりに

活動のふり返りを行い、児童が自分なりの「海のめぐみ」を考えることができた。

(2) 成果と課題

<< 成果 >>

- ・海とのつながりを教えることを通して、体験的な活動に対する意欲を高めることができた。
- ・「お林」の存在に気づくなど、真鶴の海に対し、魅力をより知ることができ、真鶴を盛り上げたい気持ちを醸成することができた。

《課題》

- ・真鶴BOOKをもっと活用するべきであった。
- ・現在の活動の、インターネットや本をもとにした調べ学習だけでなく、出会った人から聞いた生の声に、もっと耳を傾け、言葉の真意に迫る必要があった。

(3) 今後の展望

- ・干物づくり体験や定置網の体験など、体験的な活動を重視した取り組みを重ねていくことで、より一層身近な海のよさにふれていきたい。

2 協議内容

「素材を活かした探究的な学習について」というテーマで、協議を行った。

(1) 学校全体で系統性を見直す

学校全体で学習のキーワードを設定し、それに向けて学習を進めていくことはよいが、そのままにすると、同じことの繰り返しになってしまう可能性がある。そこで、改めてキーワードを見直す作業も必要であると考え。また、地域素材を活用してとどまるだけでなく、そこを手掛かりにして広げていくことも大切であると考え。

(2) 地域素材の見つけ方

地域によっては、素材がなかなか見つからないところもある。そこで食文化、土地、歴史、人などのテーマをスタートにして、身近にあるものとの比較を行っていくことで見つけていくことができるのではないかと考えられる。

(3) 子どもたちの思いを大切にしたい体験的活動

活動をすることで気づくことは様々である。こちらからの働きかけで学習を進めるのではなく、体験を通して子どもたちが感じたことや思いを大切にしたい学習を進めることも大切である。

3 まとめ

(1) 学校としての系統的な計画の効果

学校の指導計画を常に意識して指導を行うことによって、学習を探究的なもの・豊かな体験にしようとするができる。教材との出会わせ方の工夫や人との関わり方を大切にしていくことで、より良い学習になる。

(2) 指導者も探究的になる

子どもたちの思いだけを大切にすると、系統性を崩すことにもなる。そこで全体計画の見直し・改善が必要である。また、子どもたちが常に主体になって学習に取り組んでいるかを考える必要がある。例えば、人との関わりでは、指導者がお願いをするのではなく、子どもたちが自ら取材活動を行うことを目指していきたい。さらに、豊かな体験活動を目指し、指導者も探究的に総合的な学習の時間をつくる必要がある。

4 グループ協議

テーマ「子どもの学びをより探究的にするために」

- ・子どもたちが主体的に取り組めるよう、課題設定やその与え方を工夫する必要がある。子どもたちが自分の問題として捉えられるようにし、目的を明確にすることも大切である。
- ・子どもたちのゴールの姿を意識し、身に付けさせたい力を学校全体で考え、系統的に計画を立てることが大切である。

< 研究主題 >

総合的な学習の時間におけるカリキュラムマネジメントの充実
 ～ 探究のプロセスを大切にしたい学び ～

1 提案内容

横浜の総合的な学習の時間の実践がさらに充実するために、「育てようとする資質や能力及び態度」や「内容」を意識して、探究的で協働的な学びを作ることが大事である。そのため、横浜市では各専門部会でテーマにサブテーマを設け、取り組んでいる。横浜市では横浜型小中一貫教育の推進をしており、それを受け、昨年度はサブテーマを「小中一貫の視点から目指す子どもの姿を考える」とし、今年度は昨年度の成果と課題をもとに、小中ブロックでカリキュラムのマネジメントについて考え、横浜の総合的な学習の時間の実践をさらに充実させるため、「探究プロセスを大切にしたい学び」の取り組みを進めている。

探究のプロセスを意識した学習過程

探究的な学習としては、問題解決的な活動が、発展的に繰り返されていく一連の学習活動である。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の4つのプロセスのうち、「課題の設定」と「整理・分析」は、探究的な学習になるかどうかの鍵を握っている。

しかし、横浜市全体の実態から考えると、この探究のプロセスを意識した学習が展開されているとは言いがたい。例えば、「旅行的行事」を総合的な学習の時間を含めてカリキュラムを組んでいる場合、総合的な学習の時間のねらいに合ったものでないことが多く見受けられる。更に、探究的な学習になっているかどうかを視点に考えると、改善点が見えてくる。

この観点から、本研究会ではワークショップを開き、旅行的行事における現状を出し合いながら、改善点に気づき、探究のプロセスを経るような単元構想をどのように立てていけばいいのかを話し合いながら提案していく。

(1) ワークショップ

「カリキュラムマネジメントの充実のために」総合的な学習の時間の視点で旅行的行事を見直そう
 《ねらい》

それぞれの学校の旅行的行事を振り返り、総合的な学習の時間と特別活動（学校行事）の活動の違いを認識し直し、さらに充実した活動となるよう各ブロックで話し合い、共有を図る。

① ワークショップ 1 (旅行的行事の活動内容の洗い出し作業)

・各小学校の現在の旅行的行事(修学旅行)の活動を振り返り、付箋に書き出していく。

② ワークショップ 2 (活動内容の選別作業)

・付箋を、事前・当日・事後に振り分けていく。

○事前

- ・めあて決め、グループ決め等
- ・旅行先の調べ学習(パンフレットづくり)等

○当日

- ・ハイキング(滝めぐり、日光東照宮)
- ・伝統文化体験 等

ワークシート①(旅行的行事)

(事前)

(当日)

(事後)

○事後

- ・振り返り（作文、新聞、絵等にまとめる）等



- ・活動内容（付箋）を探究的なプロセスに当てはめる。

③ ワークショップ3（意見交換会）

- ・総合的な学習の時間の視点で旅行的行事を見直し、気付いたことを意見交換する。

ワークシート②（探究のプロセス）

- 課題設定
- 情報収集
- 整理・分析
- まとめ・表現

（意見）

- ・事前の調べ学習や情報があっても、旅行先で出会う人（例えば、ふくべ細工の職人等）と関わることで、憧れや感動が生まれて、そこから子どもの課題が設定されることもあるのではないかな。
- ・日光の伝統文化と鎌倉の伝統文化を比較する。世界遺産という視点からも課題を設定し比較していくことで、お互いの良さ等に気づくこともできる。
- ・自分の住む町の特色や良さを知る（発見する）ために、他の地域（日光）の特色を、修学旅行を通して知ること、発見したことを自分の町に生かしていく。修学旅行を総合的な学習の時間の目標やめあてにするのではなく、多くの活動や単元の中で扱っていくこともできる。
- ・自分のまちと日光のまちとの比較を学習の始まり（課題設定）とすることで、観光地日光がどのようにまちについてPRしているかを情報収集することで、それを参考にし、自分のまちへのPRへとつながっていく。
- ・修学旅行に関わる全時間を総合的な学習の時間だと考えるのは難しい。焦点をしばって、課題を見つけて調べ、まとめていくことで、修学旅行の一部について総合的な学習の時間として取り扱うこともできるのではないだろうか。

2 まとめ

- ・「学び方を学ぶ」ことが大事で、各学年や各単元で学んだことを次の学習につなげていく。
- ・課題の設定が大切であり、ねらいを明確にもっていなければならない。そのねらいというのは旅行そのものではない。日光修学旅行を内容（学習内容）ではなく、環境教育やキャリア教育等の一部として、旅行を利用し扱っていく。そうすることで、自分たちのまちに帰った時に、修学旅行を生かした更に良い活動（学習）にすることができる。

3 グループ協議

テーマ「子どもの学びをより探究的にするためには」 ※ワールドカフェ形式での協議

- ワールドカフェでは、アイデアを自由に出したり、自由にメモしたりして気楽に話し合う形式で、他のグループを回りながら意見や考えを共有することができる。
- ・探究的にするには課題の設定が大切。教師は知りつつ、子どもが自分達で見つけたと思わせるような課題設定をすることで、子どもの自主的な活動や学びが活発になってくる。
- ・最終的な子どもの姿やねらいを、教師が明確にとらえ進めることが大事。
- ・活動の中で発見や感動、疑問等、子どもの心を動かす体験をさせる。また、教師が意図的に活動に壁をつくったり、失敗を経験させたりすることで、子どもの中に切実感が生まれ、どうかしないといけないという気持ちが活動を更に深めることにつながる。